

## -院内の小さな声から-

かすかなノックの音が聞こえてボランティア室の扉を開けると、手にギブスをした小さな女の子と小児科の先生が立っていました。先生が「廊下の扉の中を見たんだけど入ってなかったから、ここに来たら何かあるかなー。と思って。ねっ。」と女の子の方を向いていたずらっぽく笑っています。女の子は恥ずかしそうにうつむいて小さくうなづいています。

心療内科の先生から絵の好きな女の子との面談を希望されたり、育児支援の担当の先生から学生を預かってボランティア活動に参加してもらったり、婦人科の先生からコミュニケーションの練習。ということで患者さんのボランティア活動を支援したりすることもあります。保育士さんや心理士さんと作戦会議をすることもあります。

ボランティア室という病院内の「余白」を 沢山の職員さんが認知して、様々なかた ちで活用くれるようになりました。マニュ アルはありません。臨機応変に動くのが 当院のアートディレクターの仕事です。 私の仕事をつくってくれるのは医療現場 の職員さんや患者さんに他なりません。

## -職員さんのポートレート撮影-

1月から広報委員会のメンバーになりました。そのことでより病院全 体を意識しながらお仕事させていただく機会が増えてきました。4月 の新入社員研修では当院のアートについてその理念や概要をお話さ せていただくことになっています。ホームページに掲載する職員さん のポートレートも担当させていただくことになりました。元々私は写真 家としてお仕事させていただいていた時期もあったのですが、そもそ も自分自身のセルフカウンセリング(心の治療)として写真を撮った り、文章を書いたりしていたので、技術的に上手な訳でもなく、お引き 受けするのを躊躇していた部分もあったのです。でも、一応カメラを 持っていましたし、私で役に立てるのなら。と、覚悟を決めてお引き受 けすることにしました。いざ撮ってみると。自分の技術の未熟さより何 より皆さんの表情に引き込まれました。これを「職業の顔」というので しょうか。部署や年齢に関わらず、とても安心感のある優しい表情を されます。これが医療現場で人の「いのちを救う」お仕事を生涯の仕 事とされた方々の持つ独特の力なのかもしれません。お一人お一人 の表情の向こうにある深い慈しみの心や、覚悟がにじみ出ているの を感じました。同時にこのことを写真で伝えられる喜びを感じました。

患者さんとお話するとき問いかける一言があります。「病院の中にどんなものがあったらいいと思いますか」するとそれぞれのご経験から様々な答えをくださります。そのなかに「特に何もなくてもいい。先生がちゃんと目を見て話を聞いてくれて、看護師さんが微笑みかけてくれたら」と答えた方がいました。患者と医療者の間に信頼があればきっと治療はとてもスムーズに進むのだと思います。撮影を終えてふと、思い出したことでした。



二つの異なった空間をならべることで目にはみえない何か新しい出来事が自分の中で起こるのを感じそれを楽しんで創作しています。また、私にとって作品は生きている証です。

作家名:政木 貴子